近現代の待庵の写し茶室における継承と創意に関する研究

－利休の茶の精神と茶室の造形的特徴－

A STUDY ON SUCCESSION AND ORIGINALITY OF MODERN TAIAAN UTSUSHI

－ Rikyu's idea of the tea ceremony and features of the tea ceremony room －

後藤千夏*, 瀬口哲夫**

Chika GOTO and Tetsuo SEGUCHI

This study clarifies the actual situation about succession of Rikyu's idea and originality of modern Taian Utsushi. In Taian Utsushi, the suitable designs for the modern tea ceremony in addition to the basic designs of Taian that succeed Rikyu's ideas are reproduced. And it is divided into the reproduction type, the type of valuing historical materials, and the restoration type. If a designer thinks Taian is based on Rikyu's idea, it becomes the reproduction type or the type of valuing historical materials. If a designer doesn't think Taian is based on Rikyu's idea so much, it becomes the restoration type.

Keywords : Tea ceremony room, Utsushi, Taian, Sen no Rikyu, Dimension

茶室, 写し, 待庵, 千利休, 寸法

1 はじめに

1.1 研究の背景と目的

近世の茶人が自ら指揮をとって造った茶室には、巧みに工夫された事例が多い。茶室には作者の茶精神や考え方がかたちとなって表されており¹⁾、茶室は、茶人が茶事をするための理想的空間であると考えられている。

このような茶室の一つとして、写し茶室というものがある。写しとは一般的に「灯籠、手水鉢などすべて器物の原形と同様に作ることを表す伝統用語」^{注1)}をいい、写しの原形となるものを本歌^{注2)}という。元来、茶室の設計は木割のような寸法体系が適用されるものではない^{注3)}ため、写し茶室の設計は、本歌茶室の造形を模倣することが基本となる。しかし、茶室が茶人の茶精神の表れであるという点に立ち戻れば、写し茶室は、ただ同じ型の建築を反復させたものではなく、茶人の茶精神の継承を意図されたものと理解することができる。

一方で、写しの本歌には近世の茶室が多く選ばれているが、戦国の桃山期に求められた極限の侘び茶や、武人が中心となっていた武家の茶などのあり方は、現代の生活の中に根づく茶のあり方とは大きく異なっている。写し茶室の設計には、本歌における茶の考え方と写しにおける茶の考え方の違いが含まれている。また、写し茶室

は先人の茶精神を継承するものであっても、本歌の偽作や完全な複製のみを目的として存在しているのではない。それぞれが設計者の意図をもって存在しているのであり、各茶室には独自の建築的個性となる造形が現れているはずである。茶人（茶室設計者・利用者）と茶室との関係を明らかにするうえで、写し茶室における本歌茶室の継承及び再現と、その中に織り込まれる独自の設計との関係性は重要と考える。

現在、茶室の作者（茶人）とその茶精神が注目され、かつ写し茶室の実例が多い本歌茶室の一つとして、千利休作といわれる^{注4)}妙喜庵茶室待庵がある。待庵の設計及び造形は、千利休の茶精神との深い関わりがあるといわれており、本歌の作者と写し茶室との関係を検証するのに必要な史料は多く残されている。

本研究では、写しを通した茶室設計に関する知見を得るため、千利休の茶精神を中心とした写し茶室の待庵継承のあり方、写し茶室の独創性、及び千利休の茶精神と写し茶室の設計との関連を明らかにすることを目的とする。

1.2 既往研究と本研究の位置づけ

千利休と待庵との関わりについては江戸初期から指摘されていたが、近代以降には学術的研究の発展とともに明らかにされており、その内容は堀口著『利休の茶室』³⁾、中村著『待庵 侘数寄の世界』⁴⁾

* 名古屋市立大学芸術工学部 研究員・修士(芸工)

** 名古屋市立大学大学院芸術工学研究科 教授・工博

Researcher, School of Design and Architecture, Nagoya City University, M. Design Eng.
Prof., Graduate School of Design and Architecture, Nagoya City University, Dr. Eng.

表1 待庵とその写し茶室の建物概要

席名(現地調査年月・日)	建物基本構成			茶室構成				立地情報			
	形式	外観	規模	炉	床構造	床構え	畳	所在地	所有地	建立・移築年	設計管理/施工代表者
A. 待庵 (2006.8.17)	付属茶室	切妻造、こけら葺、土庇付	茶室2畳、板畳付次ノ間1畳、勝手1畳	隅切	4尺床・室床	上座床	京間	京都府大山崎町	豊興山妙喜庵	1583年頃建立	不詳(伝 千利休)
B. 壺中庵 (2007.11.23) (2009.8.5)	組込茶室 (建物内部に組込)		茶室2畳	隅切	4尺床・室床	上座床	京間	愛知県安城市	茶坊壺中庵	1981年建立	堀尾佳弘氏/山本隆章棟梁
C. 駿河待庵 (2009.8.23)	付属茶室	切妻造、こけら葺、土庇付	茶室2畳、板畳付次ノ間1畳、勝手1畳	隅切	4尺床・室床	上座床	京間	静岡県沼津市	沼津御用邸記念公園	1999年移築	中村昌生氏/(株)安井奎工務店
D. 加賀待庵 (2006.7.26) (2009.9.24)	独立茶室	切妻造、瓦葺、土庇付	茶室2畳、板畳付次ノ間1畳、勝手1畳	隅切	4尺床・室床	上座床	京間	石川県金沢市	谷村邸	1975年建立	中村昌生氏/渡辺孝太郎棟梁
E. 松閑庵 (2006.6.23) (2009.8.28)	付属茶室	切妻造、瓦葺、土庇付	茶室2畳、板畳付次ノ間1畳	隅切	4尺床(※)	上座床	京間	京都府京都市	南禅寺塔頭天授庵	1899年移築	虎山恭宗師
F. 平成待庵 (2009.8.27)	付属茶室	切妻造、こけら葺、土庇付	茶室2畳、板畳付次ノ間1畳	隅切	5尺床・室床	上座床	京間	京都府京都市	大徳寺塔頭瑞峯院	1989年建立	中村利則氏/木下孝一棟梁
G. 工法庵 (2009.7.30)	付属茶室	切妻造、銅板葺	茶室2畳、板畳付次ノ間1畳、勝手1畳	隅切	4尺床(※)	上座床	京間	愛知県春日井市	中部大学	1990年建立	伊藤平左エ門氏(+中部大学生)

※ E.松閑庵の床は木材の鏡板張り天井、G.工法庵の床は隅柱を土で塗回していないため室床構造ではない。

表2 待庵の写し茶室の設計概要

席名	茶席の設計意図及び経緯の概要
B. 壺中庵	喫茶・和菓子販売の店舗建物内部に組み込まれた茶室で、現在は店舗の一部として公開されている。特に想定している本歌・待庵の時代設定はなく、現在の待庵の現地調査情報をもとに再現されている(※1)。茶室部分のみの再現であり、次ノ間や勝手はない。
C. 駿河待庵	1989年の名古屋・世界デザイン博覧会のパビリオンに出展された後、名古屋の高級料亭が所有していたものを沼津市が無償譲渡を受け、沼津御用邸記念公園東附属邸に移築された(※2)。『楽翁起絵図』を主とした待庵の復元と、現在の待庵の現地調査情報とを合わせて設計されている(※3)。
D. 加賀待庵	施主の谷村良治氏が『元伯宗旦筆 妙喜庵絵図』(江戸初期史料、※4)を手に入れたことを機に、江戸期の待庵の写し(復元)茶室建設が計画された。『楽翁起絵図』をもとにした中村昌生氏の設計図を基本として、施主・谷村良治氏の指導のもと、実施設計がまとめられた(※2、※5)。
E. 松閑庵	1899年に京都市の福本超雲居士の邸内に古くからあったものが移築された(※6)。明治期以前の茶室であり、待庵の復元は意図されていないと考えられる。詳細な移築経過は不明である。茶室と次ノ間のみの再現であり、勝手はない。
F. 平成待庵	『山上宗二記(関白様御座敷二畳)』(桃山期史料)をもとに考えられる待庵の原形(祖形)茶室として復元された(※7)。ただし、平面計画の復元が主として行なわれており、立面(立体)計画については現在の待庵の設計を基本としている。同史料中の沼崎四畳半座敷の記述「カキアワセクロク十遍計ヌル」にもとづき、黒い壁の復元検証などが行なわれている(※8)。茶室と次ノ間のみの再現であり、勝手はない。
G. 工法庵	『数寄屋工法集』(江戸初期史料)と現在の待庵との寸法の相違点に着目し、史料研究の一環として寸法の復元検討が行なわれた。建設は、伊藤平左エ門氏の指導のもと、大学生の作業実習教育を兼ねて行なわれた(※9)。現在は大学構内の茶事利用施設として使用されている。

表2／注釈 ※1 堀尾佳弘氏(設計者)への調査票より、2008.7.29回答。 ※2 文献8), pp. 551-552 参照。 ※3 中村昌生氏(設計者)への調査票より、2008.7.16回答。 ※4 文献9)参照。 ※5 谷村良治氏(施主)への開調調査より、2006.7.26調査。 ※6 文献10), pp. 36-40 参照。 ※7 文献11)参照。 ※8 中村利則氏(設計者)への開調調査より、2006.4.14調査。 ※9 望月義伸氏((有)伊藤平左エ門建築事務所名古屋事務所所長)への調査票より、2008.7.28回答。

等にまとめられている。

茶室の写しに関してみると、大和⁵⁾により、写しの成立背景に加えて茶人と写しとの関係性が指摘されている。個別の写し茶室の事例に関しては、中村が『妙喜庵待庵覚書』⁶⁾の考察をもとに平成待庵を造り、伊藤は『利休茶室の復原』⁷⁾に論じた研究過程をふまえて工法庵を造っている。また、著者は前稿^{註5)}において、史料と識者の指摘にもとづく待庵の特徴を抽出し、それに対する写し茶室の実態を検証した。これらはいずれも、写し茶室の成立や実態に関する建築的解明とその可能性を示すものである。しかし、本歌の作者と写し茶室の設計との関係を総括するには至っていない。

これに対し本研究では、千利休の茶精神が、待庵及び写し茶室の設計の中心的な役割を果たすものと位置づける。そして、写し茶室の現地調査結果を通して、千利休の茶精神との関係分析を行なう。これにより、近現代における待庵の写し茶室の実態、及びその要因に関する把握が可能と考える。

2 研究対象と研究方法

2.1 研究対象

研究対象建造物は、妙喜庵茶室待庵と近現代の写し茶室である。待庵は千利休作と伝えられる唯一の茶室であり^{註4)}、草庵茶室の原典として最も珍重される写し対象の一つである。

江戸期にも待庵の写し茶室は造られており、記録では1631年頃に永井尚政が淀城内に建て、1652年には前田利常が加賀の小松葭島に造ったといわれている^{註6)}。また、他にも金沢に多数建設されていたという茶書がある^{註7)}。しかし、現在に残る古い事例は存在しない。

本研究対象は、明治期以降に造られた待庵の写し茶室の中で、公に知られており^{註8)}、調査可能かつ茶事機能を有した建造物とする。これにより、研究対象写し茶室としては、茶坊壺中庵(愛知県/1981

年建立)、沼津御用邸記念公園駿河待庵(静岡県/1999年移築)、谷村邸加賀待庵(石川県/1975年建立)、南禅寺塔頭天授庵松閑庵(京都府/1899年移築)、大徳寺塔頭瑞峯院平成待庵(京都府/1989年建立)、中部大学工法庵(愛知県/1990年建立)の6席を選定した。

研究対象概要を表1に、写し茶室の設計概要を表2に示す。なお、本研究で分析対象とする待庵の室は、客の視野範囲に入る茶室・次ノ間の内部(後掲図1待庵平面図参照)とし、勝手は基本的な状況確認のみとする^{註9)}。また、本稿における待庵とは、特に説明のない限り現在の京都府にある茶室待庵を意味するものである。

2.2 研究方法

千利休の茶精神と待庵の写し茶室との関係を明らかにするため、茶室の現地調査情報と江戸期の史料情報にもとづく以下の分析考察を行なう。

1) 利休の茶精神の特徴分析 … 史料及び既往研究にもとづき、待庵に関連した利休の思想的特徴を提示する。

2) 待庵と写し茶室の造形分析 … 利休の思想的特徴に関連する待庵の造形的特徴につき、各写し茶室の実態分析を行なう。

3) 利休の茶精神と写し茶室との関連考察 … 写し茶室において継承される待庵の造形的特徴、写し茶室の独創性が表れている設計箇所、及びそれらの要因を明らかにする。また、写し茶室における利休の思想的特徴の継承と独自表現との関連を明らかにする。

3 利休の茶精神の特徴

茶室は、茶人が理想とする茶空間であり、利休はその茶室の造形の改革に心血を注いだといわれている。写し茶室に継承される待庵の造形を理解するためには、待庵の造形の中に意図された利休の構想を整理する必要がある。ここでは、待庵の設計に関わる利休の茶精神の特徴を【利休の思想的特徴】として把握する。

表3 【利休の思想的特徴】と【待庵の造形的特徴】との対応関係

【利休の思想的特徴】		【待庵の造形的特徴】
〔①名物の否定〕	… ◇ 名物・格式の茶からの脱却。 ◇ 侘び茶に相応しい床への改革。	・ 床(床畳・天井高・床開口部)が小さい。 ・ 床柱・框・落掛が自然材の質感をもつ材料。 ・ 壁内・天井を土で塗廻し(室床)。
〔②小さな空間〕	… ◇ 素朴で慎ましい生活のたたずまい。 ◇ 小さな空間でありながら、その小ささをいとわせない造り。	・ 茶室は2畳空間、天井高が低い。 ・ 小さめの炉(小板なし)、入隅壁の土塗廻しにより、広くみせる。 ・ 2つの平天井に掛込天井を入れ、空間のゆとりをつくる。
〔③採光の調整〕	… ◇ 時とともに変化する光。 ◇ 厳密な採光調整によるほの暗さと、ほの明るさ。	・ (北向きではなく)南向きの茶室。 ・ 直射日光と明障子の透過光、白太鼓襖の反射光。 ・ 土間庇によって強い直射日光を避ける。 ・ 窓の大きさや位置により厳密に採光を調整。
〔④素朴な質感の材料〕	… ◇ 「格式・書院造からの脱却、素朴な造り」に適した素朴な質感の材料。	・ 床部材に丸太・節付・皮付、天井に竹材・丸太材を使用。 ・ 土壁を施工(床の土天井を含む)。 ・ 長す入り土壁(荒壁の表現)。
〔⑤細めの寸法の部材〕	… ◇ 「格式・書院造からの脱却、素朴な造り」に適した寸法の部材。	・ ほっそりとした形にみえる寸法の窓及び天井部材。

茶道裏千家15代家元 千玄室氏は、『南方録』^{注10)}等の史料から、利休の茶精神のあり様を次のようにまとめている。「利休が意図したのは、茶を媒介としての宗教的自由の境涯への飛躍にあった。世俗的なもの、世塵的なものから、茶の湯の形式を借りて、なんとかして超脱しようとするものであった。(中略)この理念が、侘び茶の構成の基本的な原理となる。^{注11)}ここに示される侘び茶の理想が、待庵の造りに表されていると考えられる。

これにもとづき、茶室に現れる侘び茶の具体的構想5点を【利休の思想的特徴】として以下に提示する。

〔①名物の否定〕

利休期以前の室町期には、名物を重んじる茶を中心として茶湯の許可制なども行なわれ、茶湯に権威や格式がつけられるようになっていた。利休は、このような名物や格式を尊重する茶から脱することを求めて、茶道具や名物が飾られる床(床ノ間)の革新を行なった。床を素朴な土壁で囲まれた小さな空間にし、床柱や框を自然木で設えることで、床に偏りがちだった空間的重心を茶室内に分散させ、均衡をとらせることとした。

〔②小さな空間〕

茶事で世俗からの脱却を行なうためには、素朴で慎ましい生活を想起させる茶空間が求められる。したがって、茶室は小さく凝縮された空間として造られるようになり、さらに利休は、二畳のみならず一畳半にせまる小空間を求めることもあったという。しかしその一方で、小空間を狭く息苦しいものと客に感じさせないための造形的工夫が必要となった。

〔③採光の調整〕

利休期に隆盛していた紹鴎四畳半にみられるように、当時の茶空間では安定した北向きの一方採光が行なわれていた。しかし「宗易(利休)は南向をすく」といわれるように、晩期の利休は北向きの茶室を好まず、時とともに移り変わる光を取り込んだといわれている^{注12)}。ただし、茶室内の景色をつくる採光演出は重要であったため、下地窓などによる厳密な採光調整が行なわれたと考えられる。

〔④素朴な質感の材料〕

素朴で慎ましい姿の茶室を造るためには、それに相応しい簡素な建築材料の使用が求められる。このような材料の質感に着目すると、待庵には、丸太や竹材等の自然の風合いをみせた素材、木目・節・木皮肌をみせた野趣に富む加工木材、及び土壁等の素朴な質感の材料が使用されている。

〔⑤細めの寸法の部材〕

④に関連し、素朴で慎ましい茶室に相応しい材料として、ほっそりとした形にみえる寸法の部材があげられる。このような細めの寸法の部材は、格式のある堅固な建築材料と対極の、簡素な建物の造りを印象づける効果をもつ。

以上の【利休の思想的特徴】は、現在の待庵の設計に反映されており、【待庵の造形的特徴】として現れている(表3参照)。

4 待庵と写し茶室の造形

【待庵の造形的特徴】に関する写し茶室の実態を表4-1、表4-2に、待庵の平面・見上・展開図を図1に示す。表4-1、表4-2には、待庵と写し茶室の他、C. 駿河待庵・D. 加賀待庵の設計の参考となった史料(a)『楽翁起絵図』^{注13)}、F. 平成待庵の平面構成の参考となった史料(b)『山上宗二記』^{注14)}、G. 工法庵の寸法設計の中心となった史料(c)『数寄屋工法集』^{注15)}の内容も同じく示す。なお、待庵と史料については、別の部位の寸法から算出した寸法も含まれている。また、以下本稿においては、図1の(a)～(f)面展開図で図示した面を(a)～(f)面として示すこととする。

待庵の次ノ間(f)面の窓構成は、江戸末期に改変されたことが明らかとなっている^{注16)}。そのため、『楽翁起絵図』及び『数寄屋工法集』における次ノ間(f)面窓は、現在の待庵に比べて壁面の高い位置に記されている。しかし、その他の部分では、現在の待庵と江戸中～末期の待庵との大きな隔たりはないと考えられている^{注17)}。

B. 壺中庵では、待庵の茶室のみを忠実に再現することが基本となっており、〔①名物の否定〕及び〔②小さな空間〕の特徴が多く再現されている。しかし、組込茶室ということもあり、〔③採光の調整〕に関連する基本的な立地環境は満たされていない。そのため、窓構成は意匠的なデザインとして再現されていると考えられる。〔④素朴な質感の材料〕に関わる素材には待庵と類似したものが用いられているが、細部の加工的特徴は再現されていない。また、〔⑤細めの寸法の部材〕に関してみると、製材された部材を中心として待庵の寸法再現が行なわれている。

C. 駿河待庵は〔①名物の否定〕、〔②小さな空間〕、及び〔④素朴な質感の材料〕の特徴が多く再現されている。〔③採光の調整〕に関わる茶室の向きは、敷地条件によって東向きになっている。窓構成に関しては、次ノ間(f)面について江戸期待庵の復元が行なわれている(図2参照)が、他は現在の待庵の構成が再現されている。な

表4-1 【待庵の造形的特徴】に対する写し茶室の実態と史料記載内容（茶室）

★現在の待庵との相違あり（寸法については「⑤細めの寸法の部材」は0.03尺以上、他は0.1尺以上の待庵との差があるもの）／対象室・部位が存在せず 一史料記載なし 寸法単位：尺												
【待庵の造形的特徴】に関する部位 （▼ 寸法に関連する部位）			茶席の実測寸法（席名下段は設計時に参照された主な寸法情報）							待庵に関連する史料寸法		
			A. 待庵 （※1）	B. 壺中庵	C. 駿河待庵	D. 加賀待庵	E. 松閑席	F. 平成待庵	G. 工法庵	史料(a) 楽翁 起絵図	史料(b) 山上 宗二記	史料(c) 数寄屋 工法集
①名物の否定	床	▼ 床臺／長辺	3.82	3.81	3.80	3.73	3.83	★ 4.79	3.83	3.82	—	3.82
		▼ "／短辺	2.32	2.29	2.32	2.28	2.31	2.31	2.36	2.32	—	2.32
		▼ 床開口部／内法幅（※2）	3.82	3.81	3.82	3.80	3.80	★ 4.79	3.83	3.82	★(5.00 か)	3.82
		▼ "／内法高（床框～落掛）（※3）	4.71	4.71	4.72	4.73	4.71	4.71	4.62	4.72	—	4.62
		床柱の形状（※4）	丸太	丸太	丸太	丸太	丸太	丸太	丸太	丸太	—	—
		床柱／意匠的な削り加工（※5、※6）	擦上げ	擦上げ	擦上げ	擦上げ	★ 筭面、 新目付	★ 筭面	★ 面付	—	—	—
		床框の形状（※4）	丸太	丸太	丸太	丸太	丸太	丸太	丸太	—	—	—
		床框／意匠的な削り加工（※5、※6）	なし	なし	なし	なし	★ 新目付	★ 新目付	★ 面付	—	—	—
		"／意匠的な節の数	3個	3個	3個	3個	★ 0個	★ 0個	★ 0個	—	—	—
		落掛の加工（※7）	皮付	★ 皮目ナシ	皮付	皮付	皮付	皮付	★ 皮目ナシ	—	—	—
②小さな空間	天井	▼ 床天井高（床臺面～床天井）	5.31	5.27	★ 5.21	5.36	★ 5.84	★ 6.14	★ 4.98	5.40	—	★ 5.01
		床天井／床天井の形状	土天井	土天井	土天井	土天井	★ 板天井	土天井	土天井	土天井	—	—
		床壁仕上（※8）	土壁	土壁	土壁	土壁	土壁	土壁	土壁風	土壁	—	—
		床壁形状／入隅の壁の形状（※9）	塗廻し	塗廻し	塗廻し	塗廻し	塗廻し	塗廻し	★ 入隅角	塗廻し	—	—
		畳枚数	2畳	2畳	2畳	2畳	2畳	2畳	2畳	2畳	2畳	2畳
		▼ 畳／長辺	6.33	6.30	6.34	6.26	6.30	6.34	6.28	—	—	—
		▼ "／短辺	3.17	3.15	3.16	3.13	3.14	3.16	3.15	—	—	—
		▼ 炉／大きさ	1.35	1.35	1.35	1.34	1.39	1.35	1.34	1.34	—	—
		"／小板	なし	なし	なし	なし	★ あり	なし	なし	なし	なし	なし
		床壁形状／入隅の壁の形状（※9）	塗廻し	塗廻し	塗廻し	塗廻し	塗廻し	塗廻し	★ 入隅角	塗廻し	—	—
③採光の調整	開口	▼ (c)面開口／内法幅	2.37	2.35	2.35	2.36	2.36	2.37	2.36	2.37	—	2.36
		▼ "／内法高	2.59	2.59	2.59	2.59	2.61	2.59	2.60	2.61	—	2.60
		天井構成／天井種数	3種	3種	3種	3種	3種	3種	3種	3種	—	3種
		▼ 炉上天井高（畳面～天井板）	5.94	5.94	5.99	★ 6.04	6.01	5.94	★ 5.81	5.97	—	★ 5.80
		▼ 床前天井高（畳面～天井板）	5.94	5.94	5.97	★ 6.08	5.97	5.92	★ 5.78	—	—	—
		▼ 掛込天井高（畳面～軒寄り垂木掛上端）	6.05	6.01	6.02	6.09	6.02	5.98	★ 5.95	6.05	—	★ 5.95
		▼ "（畳面～棟寄り垂木掛上端）	7.20	7.19	7.23	7.21	7.12	★ 7.49	7.26	—	—	—
		▼ "（(c)面天井小壁～棟寄り垂木掛上端）	1.27	1.25	1.25	1.22	★ 1.08	★ 1.57	1.36	1.22	—	1.34
		壁形状／(a)(d)面角／入隅の壁の形状（※9）	塗廻し	塗廻し	塗廻し	塗廻し	塗廻し	塗廻し	★ 入隅角	塗廻し	—	—
		立地外観	茶室の向き（茶室内からみた開口側壁面の方位）	南	南東	★ 東	南東	南	★ 西	★ 北	—	—
④素朴な質感の材料	床	直射日光による採光（※10）	可	★ 不可	可	可	可	可	可	—	—	—
		土間底	あり	★ なし	あり	あり	あり	あり	★ なし	あり	—	—
		▼ (b)面左窓障子／横	1.39	1.40	1.41	1.41	1.37	1.40	1.41	—	—	1.40
		▼ "／縦	1.55	1.55	1.58	1.58	1.55	1.55	1.60	1.60	—	1.57
		▼ "／横位置（床相手柱～窓障子左端）	0.31	0.29	0.34	0.26	0.34	0.31	0.28	—	—	0.29
		▼ "／縦位置（畳面～窓障子下）	2.61	2.60	2.60	2.60	2.62	★ 2.51	2.53	2.60	—	2.54
		▼ (b)面右窓障子／横	1.85	1.88	1.88	1.88	1.79	1.88	1.88	—	—	1.88
		▼ "／縦（数鴨居の内法高）	1.78	1.74	1.74	1.73	1.76	1.80	1.70	1.75	—	1.70
		▼ "／横位置（窓障子右端～(b)(c)面角柱）	0.58	0.50	0.57	0.50	0.67	0.50	★ 0.45	—	—	0.50
		▼ "／縦位置（畳面～窓障子下端）	2.33	2.34	2.32	2.33	2.33	2.30	2.34	2.33	—	2.35
⑤細めの寸法の部材	天井	▼ (c)面窓／横	4.39	4.35	4.39	4.33	4.40	4.39	4.33	4.40	—	4.33
		▼ "／縦	1.95	1.94	1.93	1.93	1.96	1.97	1.94	1.95	—	1.95
		▼ "／横位置（窓右端～(c)(d)面角柱）	0.34	0.33	0.35	0.35	0.26	0.40	0.26	0.30	—	0.28
		▼ "／縦位置（畳面～窓下端）	2.67	2.67	2.66	2.65	2.69	2.66	2.75	2.68	—	—
		窓建具の種類（※11）	明障子	明障子	明障子	明障子	明障子	明障子	明障子	明障子	—	明障子
		次ノ間境建具の横の種類	太鼓張	太鼓張	太鼓張	太鼓張	太鼓張	太鼓張	太鼓張	太鼓張	—	—
		▼ 次ノ間境建具開口部／内法幅	4.70	4.69	4.69	4.70	4.72	4.70	★ 4.59	★ 4.80	—	★ 4.60
		▼ "／内法高	4.90	4.89	4.90	4.90	4.89	4.90	4.85	4.90	—	4.85
		床柱の形状（※4）	丸太	丸太	丸太	丸太	丸太	丸太	丸太	丸太	—	—
		床柱／意匠的な削り加工（※5、※6）	擦上げ	擦上げ	擦上げ	擦上げ	★ 筭面、 新目付	★ 筭面	★ 面付	—	—	—
⑤細めの寸法の部材	開口	床框の形状（※4）	丸太	丸太	丸太	丸太	丸太	丸太	丸太	—	—	—
		床框／意匠的な削り加工（※5、※6）	なし	なし	なし	なし	★ 新目付	★ 新目付	★ 面付	—	—	—
		"／意匠的な節の数	3個	3個	3個	3個	★ 0個	★ 0個	★ 0個	—	—	—
		落掛の加工（※7）	皮付	★ 皮目ナシ	皮付	皮付	皮付	皮付	★ 皮目ナシ	—	—	—
		床天井／床天井の形状	土天井	土天井	土天井	土天井	★ 板天井	土天井	土天井	土天井	—	—
		床壁仕上（※8）	土壁	土壁	土壁	土壁	土壁	土壁	土壁風	土壁	—	—
		次ノ間境建具／方立の削り加工	新目付	★ なし	新目付	新目付	新目付	新目付	★ なし	新目付	—	—
		天井材／炉上天井／竿縁	竹	竹	竹	竹	竹	竹	竹	竹	—	竹
		"／廻縁	竹	竹	竹	竹	竹	竹	竹	竹	—	竹
		"／天井留り	丸太	丸太	丸太	丸太	丸太	丸太	丸太	丸太	—	丸太
⑤細めの寸法の部材	天井	天井材／床前天井／竿縁	竹	竹	竹	竹	竹	竹	竹	—	—	竹
		"／天井留り	丸太	丸太	丸太	丸太	丸太	丸太	丸太	丸太	—	丸太
		天井材／掛込天井／垂木	竹	竹	竹	竹	竹	竹	竹	竹	—	—
		壁仕上（※8）	土壁	土壁	土壁	土壁	土壁	土壁	土壁風	土壁	—	—
		"／混入される長スサ(2寸以上の長さ)（※8）	あり	★ なし	あり	あり	★ なし	★ なし	★ なし	—	—	—
		柱の形状（※4）	丸太	丸太	丸太	丸太	丸太	丸太	丸太	丸太	—	—
		▼ 床柱／径（※12）	0.22	★ 0.26	★ 0.26	0.23	0.23	0.23	0.24	—	—	—
		▼ 床框／見付	0.25	0.24	0.24	0.24	0.23	0.25	0.24	0.25	—	0.24
		▼ "／見込	0.13	0.15	0.15	0.12	0.15	0.11	0.11	0.13	—	0.11
		▼ 落掛／見付	0.12	0.11	0.11	0.10	0.11	0.12	0.11	0.12	—	0.11
⑤細めの寸法の部材	開口	▼ "／見込（※12）	0.22	0.22	0.24	0.20	0.22	0.22	0.22	0.22	—	0.23
		▼ (b)面左窓／障子数居／見付	0.07	0.07	0.06	0.07	0.07	0.07	0.06	0.07	—	0.08
		▼ (b)面右窓／中数居／見付	0.07	0.07	0.06	0.07	0.07	0.07	★ 0.13	0.07	—	0.07
		▼ "／鴨居／見付	0.07	0.07	0.06	0.07	0.07	0.07	★ 0.13	0.07	—	0.07
		▼ (c)面窓／中数居／見付	0.08	0.08	0.07	0.07	0.09	0.08	★ 0.15	0.08	—	★ 0.14
		▼ "／鴨居／見付	0.08	0.08	0.07	0.07	0.08	0.08	0.07	0.07	—	0.07
		▼ "／軒寄り方立／見付	0.08	0.07	0.07	0.07	0.08	0.08	0.07	0.07	—	0.07
		▼ "／棟寄り方立／見付	0.08	0.07	0.07	0.07	0.08	0.08	0.07	—	—	0.07
		▼ (c)面開口／方立／見付	0.07	0.07	0.07	0.07	0.07	0.07	0.07	0.07	—	0.07
		▼ 次ノ間境建具／鴨居／見付	0.08	0.08	0.07	0.07	0.08	0.08	0.07	0.09	—	0.07
⑤細めの寸法の部材	天井	▼ "／方立／見付	0.07	0.08	0.07	0.07	0.08	0.07	0.07	0.09	—	0.07
		▼ 炉上天井／竿縁／径	0.05	0.04	0.05	0.05	0.06	0.05	0.04	—	—	0.05
		▼ "／廻縁／幅	0.12	0.12	0.12	0.13	0.10	0.11	0.12	—	—	0.12
		▼ 床前天井／竿縁／径	0.05	0.03	0.05	0.04	0.03	0.05	0.04	—	—	0.05
		▼ "／天井留り／径	0.17	0.17	0.17	0.18	★ 0.20	★ 0.14	0.17	—	—	0.17
		▼ 掛込天井／垂木／径	0.12	0.12	★ 0.15	0.12	★ 0.08	0.11	0.12	0.11	—	0.12
		▼ "／横掛小壁／径	0.05	0.04	0.05	0.04	0.04	0.04	0.04	—	—	0.05
		▼ 床柱／見付	0.25	0.24	0.24	0.24	0.23	0.25	0.24	0.25	—	0.24
		▼ "／見込	0.13	0.15	0.15	0.12	0.15	0.11	0.11	0.13	—	0.11
		▼ 落掛／見付	0.12	0.11	0.11	0.10	0.11	0.12	0.11	0.12	—	0.11
⑤細めの寸法の部材	開口	▼ "／見込（※12）	0.22	0.22	0.24	0.20	0.22	0.22	0.22	0.22	—	0.23
		▼ (b)面左窓／障子数居／見付	0.07	0.07	0.06	0.07	0.07	0.07	0.06	0.07	—	0.08
		▼ (b)面右窓／中数居／見付	0.07	0.07	0.06	0.07	0.07	0.07	★ 0.13	0.07	—	0.07
		▼ "／鴨居／見付	0.07	0.07	0.06	0.07	0.07	0.07	★ 0.13	0.07	—	0.07
		▼ (c)面窓／中数居／見付	0.08	0.08	0.07	0.07	0.09	0.08	★ 0.15	0.08	—	★ 0.14
		▼ "／鴨居／見付	0.08	0.08	0.07	0.07	0.08	0.08	0.07	0.07	—	0.07
		▼ "／軒寄り方立／見付	0.08	0.07	0.07	0.07	0.08	0.08	0.07	0.07	—	0.07
		▼ "／棟寄り方立／見付	0.08	0.07	0.07	0.07	0.08	0.08	0.07	—	—	0.07
		▼ (c)面開口／方立／見付	0.07	0.07	0.07	0.07	0.07	0.07	0.07	0.07	—	0.07
		▼ 次ノ間境建具／鴨居／見付	0.08	0.08	0.07	0.07	0.08	0.08	0.07	0.09	—	0.07
⑤細めの寸法の部材	天井	▼ "／方立／見付	0.07	0.08	0.07	0.07	0.08	0.07	0.07	0.09	—	0.07
		▼ 炉上天井／竿縁／径	0.05	0.04	0.05	0.05	0.06	0.05	0.04	—	—	0.05
		▼ "／廻縁／幅	0.12	0.12	0.12	0.13	0.10	0.11	0.12	—	—	0.12
		▼ 床前天井／竿縁／径	0.05	0.03	0.05	0.04	0.03	0.05	0.04	—	—	0.05
		▼ "／天井留り／径	0.17	0.17	0.17	0.18	★ 0.20	★ 0.14	0.17	—	—	0.17
		▼ 掛込天井／垂木／径	0.12	0.12	★ 0.15	0.12	★ 0.08	0.11	0.12	0.11	—	0.12
		▼ "／横掛小壁／径	0.05	0.04	0.05	0.04	0.04	0.04	0.04	—	—	0.05
		▼ 床柱／見付	0.25	0.24	0.24	0.24	0.23	0.25	0.24	0.25	—	0.24
		▼ "／見込	0.13	0.15	0.15	0.12	0.15	0.11	0.11	0.13	—	0.11
		▼ 落掛／見付	0.12	0.11	0.11	0.10	0.11	0.12	0.11	0.12	—	0.11
⑤細めの寸法の部材	開口	▼ "／見込（※12）	0.22	0.22	0.24	0.20	0.22	0.22	0.22	0.22	—	0.23
		▼ (b)面左窓／障子数居／見付	0.07	0.07	0.06	0.07	0.07	0.07	0.06	0.07	—	0.08
		▼ (b)面右窓／中数居／見付	0.07	0.07	0.06	0.07	0.07	0.07	★ 0.13	0.07	—	0.07
		▼ "／鴨居／見付	0.07	0.07	0.06	0.07	0.07	0.07	★ 0.13	0.07	—	0.07
		▼ (c)面窓／中数居／見付	0.08	0.08	0.07	0.07	0.09	0.08	★ 0.15	0.08	—	★ 0.14
		▼ "／鴨居／見付	0.08	0.08	0.07	0.07	0.08	0.08	0.07	0.07	—	0.07
		▼ "／軒寄り方立／見付	0.08	0.07	0.07	0.07	0.08	0.08	0.07			

表4-2 【待庵の造形的特徴】に対する写し茶室の実態と史料記載内容（次ノ間）

★現在の待庵との相違あり（寸法については「⑤細めの寸法の部材」は0.03尺以上、他は0.1尺以上の待庵との差があるもの）／対象室・部位が存在せず 一史料記載なし 寸法単位：尺

【待庵の造形的特徴】に関する部位 (▼寸法に関連する部位)		茶席の実測寸法 (席名下段は設計時に参照された主な寸法情報)							待庵に関連する史料寸法		
		A. 待庵 (※1)	B. 壺中庵	C. 駿河待庵	D. 加賀待庵	E. 松閑庵	F. 平成待庵	G. 工法庵	史料(a) 楽翁 起絵図	史料(b) 山上 宗二記	史料(c) 数寄屋 工法集
		A.待庵		史料(a)	史料(a)他	(不明)	史料(b), A.待庵	史料(c)			
② 平面	畳枚数 他	1畳板畳		1畳板畳	1畳板畳	1畳板畳	1畳板畳	1畳板畳	1畳板畳	★(1畳か)	1畳板畳
	▼畳／長辺	6.33		6.34	6.27	6.30	6.33	6.29	—	—	—
	▼"／短辺	3.22		3.22	★3.04	3.18	3.21	3.17	—	—	—
	▼板畳幅	0.80		0.81	★0.95	0.83	0.81	0.85	0.85	—	0.87
天井	天井構成／天井種数	1種		1種	1種	1種	1種	1種	1種	—	1種
	▼天井高(畳面～天井板)	6.02		5.97	6.03	5.98	5.97	5.96	6.07	—	5.95
③ 開口	▼(c)面窓障子／横	1.98		2.05	1.98	1.99	1.95	1.98	1.96	—	1.98
	▼"／縦(敷鴨居の内法高)	1.95		1.94	1.93	2.00	1.95	1.95	1.95	—	1.95
	▼"／縦位置(畳面～窓障子下端)	1.22		1.22	1.27	★2.39	1.21	1.23	1.25	—	1.25
	▼(f)面窓障子／横	1.14		1.14	1.14	★1.50	1.22	1.14	1.14	—	1.14
	▼"／縦	0.98		0.98	0.98	★1.90	★1.12	0.98	0.98	—	0.98
	▼"／横位置((c)(f)面角柱～窓障子左端)(※13)	3.01		★1.32	★1.19	★1.86	★1.24	★1.79	★1.30	—	—
	▼"／縦位置(畳面～窓障子下端)	1.92		★4.73	★4.66	★2.22	★4.40	★4.63	★4.72	—	★4.65
	窓建具の種類(※11)	明障子		明障子	明障子	明障子	明障子	明障子	明障子	—	—
	勝手境建具の境の種類	太鼓張		太鼓張	太鼓張	太鼓張	太鼓張	太鼓張	太鼓張	—	—
	▼勝手境建具開口部／内法幅	2.34		2.35	2.39	★1.95	2.27	2.30	2.32	—	2.30
	▼"／内法高	5.50		5.50	5.50	★5.26	5.45	5.50	5.54	—	5.50
天井	天井材／竿縁	竹		竹	竹	竹	竹	竹	竹	—	竹
	壁仕上(※8)	土壁		土壁	土壁	土壁	土壁	土壁風	土壁	—	—
	"／混入される長さ(2寸以上の長さ)(※8)	あり		あり	あり	★なし	★なし	★なし	—	—	—
その他	柱の形状(※4)	丸太		丸太	丸太	丸太	丸太	丸太	丸太	—	—
⑤ 開口	▼(c)面窓／中敷居／見付	0.07		0.06	0.07	0.09	0.07	★0.11	0.07	—	★0.10
	▼"／鴨居／見付	0.07		0.06	0.07	0.07	0.07	★0.11	0.07	—	★0.10
	▼勝手境建具／鴨居／見付	0.08		0.07	0.07	0.08	0.09	0.10	0.09	—	0.10
	▼"／方立／見付	0.07		0.07	0.07	0.08	0.07	★0.10	0.07	—	★0.10
	▼平天井／竿縁／径	0.05		0.05	0.05	0.04	0.06	0.04	—	—	0.05
	▼"／廻縁／幅	0.08		0.07	0.07	0.10	0.08	★0.12	0.07	—	★0.12

表4-3 【待庵の造形的特徴】に対する写し茶室の実態と史料記載内容（勝手）

★現在の待庵との相違あり（寸法については「⑤細めの寸法の部材」は0.03尺以上、他は0.1尺以上の待庵との差があるもの）／対象室・部位が存在せず 一史料記載なし 寸法単位：尺

【待庵の造形的特徴】に関する部位 (▼寸法に関連する部位)		茶席の実測寸法 (席名下段は設計時に参照された主な寸法情報)							待庵に関連する史料寸法		
		A. 待庵 (※1)	B. 壺中庵	C. 駿河待庵	D. 加賀待庵	E. 松閑庵	F. 平成待庵	G. 工法庵	史料(a) 楽翁 起絵図	史料(b) 山上 宗二記	史料(c) 数寄屋 工法集
		A.待庵		史料(a)	史料(a)他	(不明)	史料(b), A.待庵	史料(c)			
② 平面	畳枚数 他	1畳		1畳	1畳			1畳	1畳	—	1畳
	▼畳／長辺	6.46		6.50	6.41			★6.26	—	—	—
	▼"／短辺	3.14		3.13	★3.03			3.17	—	—	—
	▼天井構成／天井種数	1種		1種	1種			1種	1種	—	1種
天井	▼天井高(畳面～天井板)	5.96		5.97	★5.85			5.94	6.00	—	5.88
	▼(f)面窓障子／横	1.45		1.46	1.45	★1.64	1.47	1.46	1.45	—	1.45
開口	▼"／縦	1.14		1.15	1.15	★1.94	1.13	1.14	1.15	—	1.14
	▼"／横位置(次ノ間・勝手境柱～窓障子左端)	0.47		★1.01	★0.79	★0.60	★0.85	★0.98	★0.98	—	★0.98
	▼"／縦位置(畳面～窓障子下端)	3.63		★4.58	★4.45	★2.20	★4.41	★4.54	★4.63	—	—
	窓建具の種類(※11)	明障子		明障子	明障子	明障子	明障子	明障子	明障子	—	明障子
天井	天井材／竿縁	竹		竹	竹			竹	竹	—	竹
	壁仕上(※8)	土壁		土壁	土壁			土壁風	土壁	—	—
その他	"／混入される長さ(2寸以上の長さ)(※8)	あり		あり	あり			★なし	—	—	—
その他	柱の形状(※4)	丸太		丸太	丸太			丸太	丸太	—	—
⑤ 天井	▼平天井／竿縁／径	0.05		0.05	0.05	0.06	0.07	0.04	—	—	0.05
	▼"／廻縁／幅	0.08		0.07	0.08	0.10	★0.11	★0.14	0.07	—	★0.12

表4-1、表4-2、表4-3について／

◆各表の左端にある黒色背景セルの番号は、5つの【利休の思想的特徴】の番号。①は「①名物の否定」、②は「②小さな空間」、③は「③採光の調整」、④は「④素朴な質感の材料」、⑤は「⑤細めの寸法の部材」を指す。◆各表の右列の史料について、『楽翁起絵図』は『松平家旧蔵数寄屋絵図』の妙喜庵囲建地割、『山上宗二記』は『山上宗二記』の関白様御座敷二畳、『数寄屋工法集』は『雛形数寄屋工法集中巻』の利休園之事の記載内容である。◆床柱・床框・落掛の形状及び加工、床天井、床壁仕上及び形状については、複数の【利休の思想的特徴】に該当するため重複している。◆参考として待庵の勝手に相当する室を表4-3として示しているが、本文においては分析対象外とする。

表4-1、表4-2、表4-3／注釈 ※1 待庵については、基本的に文献15の寸法を使用しているが、部分的に文献16及び現地実測寸法を使用。※2 床開口部とは、茶室に面した床の間の開口部分。床柱と床相手柱、床框と落掛の間。※3 丸太柱の木目を見せる加工方法として、床柱の見付下部を柱径の2～3倍の高さまで削る「当面」（文献2, p. 994）、柱全長5/8の高さまで削る「擦上げ」（文献17, pp. 261-262）がある。※4 当部分の「丸太」には、丸太の風合いをもつ面皮材等も含まれるが、角木は除く。※5 「鉋目付」とは、木材表面に鉋の削り面が付けられた部材。※6 「面付」とは、丸太表面の一部が平らに削り取られた部材。※7 通常、落掛には平角材が用いられる（文献4, pp. 121-127）が、「皮付」とした席の落掛には床柱の際に少し丸みをもつ皮目が残る。※8 工法庵の壁は新建材であるが、土壁の風合いとなるように造られている。※9 「入隅角」とは、入隅がつけられて角柱が表出している造り。※10 史料に関しては、外構記述を含む等、明らかに採光が可能なものを考慮した。※11 現在の松閑庵では障子は使われていないが、保管されていた障子を実測。※12 待庵の寸法については、文献16, p. 39 参照。※13 当部分の待庵の寸法については、2006. 8. 17現地実測寸法を記載。

図1 待庵の内部図面(平面図・天井見上図・内部展開図)

0 500 1000 2000

お、現在の待庵と『楽翁起絵図』とで相違する茶室・次ノ間境建具開口幅は、現在の待庵の寸法が採用されている。〔⑤細めの寸法の部材〕に関してみると、現在の待庵の寸法がほぼ再現されており、積極的な変更は行なわれていない。

D. 加賀待庵の状況はC. 駿河待庵に類似しているが、〔③採光の調整〕に関わる茶室の向きは、待庵と同じく南面させるように意図されている^{注18)}。窓構成に関しては、次ノ間(f)面について江戸期待庵の復元が行なわれている(図2)が、他は現在の待庵の構成が再現されている。現在の待庵と『楽翁起絵図』とで相違する茶室・次ノ間境建具開口幅は、現在の待庵の寸法が採用されている。〔⑤細めの寸法の部材〕については、現在の待庵の寸法が再現されている。

E. 松閑席の〔①名物の否定〕及び〔④素朴な質感の材料〕に関わる造形をみると、床柱や床框には待庵にはない鉋目削り^{注19)}加工が施されている(写真1参照)。床天井が高く鏡板張り天井になっていることから、格式を重んじる意図があると考えられる。炉は待庵の炉よりも大きい1.4尺(1.39尺)角で、壁際の隅に小板が入る(写真2参照)。これは2畳の〔②小さな空間〕に余裕を持たせる工夫よりも、現代の茶事利用に適した造形が必要とされて造られたものである。〔③採光の調整〕の特徴をみると、茶室の向きや茶室の窓構成は待庵に類似しているが、次ノ間には独自の水揚げ口がつけられ、機能的な改良が行なわれている(図3参照)。〔⑤細めの寸法の部材〕に関しては約1〜3分の寸法差異がみられるが、待庵の空間イメージには反しない程度である。

F. 平成待庵では、『山上宗二記』を参考として5尺床に造られ(写真1)、それに調和するように床天井高が高く造られている。〔③採光の調整〕に関わる茶室の向きは、敷地条件により西向きになっている。窓構成に関しては、次ノ間(f)面について江戸期待庵の復元が行なわれている(図2)が、他は現在の待庵の構成が再現されている。〔④素朴な質感の材料〕に関わる造形をみると、待庵とは異なり、床柱には筭面^{注20)}の削り加工、床框には独自の鉋目削り加工が施されている(写真1)。丸太柱の使用は『山上宗二記』の記述内容から検討されたものであり、待庵の再現のみを意図されたものではない。〔⑤細めの寸法の部材〕に関しては約1〜3分の寸法差異がみられるが、待庵の空間イメージには反しない程度である。

G. 工法庵では『数寄屋工法集』の寸法にもとづく復元が行なわれている。史料研究に関わる仮説⁷⁾を検証するため、床入隅柱を塗廻さずに角がつけられていることが、待庵との大きな違いである(写真1)。〔②小さな空間〕に関わる造形をみると、現在の待庵と異なる史料寸法を採用したことにより天井高が低くなっている。また、茶室(a)(d)面角の入隅柱の塗廻しも行なわれておらず、空間を大きく見せる工夫にはなっていない。〔③採光の調整〕に関わる状況をみると、外部の土間底がつけられていないが、敷地条件により北向きになっているため、ほの明るい光環境がつくられている。史料寸法にもとづき、茶室・次ノ間境建具開口幅は小さく造られ、次ノ間(f)面窓は復元されている(図2)が、他の窓構成は待庵に類似している。〔④素朴な質感の材料〕の造形をみると、史料には材料のことがあまり書かれていないこともあり、現在の待庵の丸太や竹等の素材が多く用いられている。しかし、待庵の床框の節、及び皮付落掛等の特徴は再現されていない(写真1)。〔⑤細めの寸法の部材〕については、史料寸法と現在の待庵の寸法との相違が少ないため、結

果的に待庵と類似している。ただし、(b)・(c)面の窓敷鴨居見付については、現在の待庵よりも史料当時の方が大きかったという研究仮説⁷⁾を立てているため、史料と異なる場合であっても、その寸法は大きめに造られている(図4参照)。

以上のように、写し茶室は単なる複製ではなく、現実的な制約や【待庵の造形的特徴】に対する各々の解釈が反映されて造られている。この状況が、写し茶室の造形の多様性をつくりだしている。

5 写し茶室における継承と創意

5.1 写し茶室に継承される造形

利休は、茶湯の極意について、「惣而茶道に大事の習と云事さらになし 皆自己の作意機転にてならひのなきを台子の極意とする」と教えたという(『貞要集』)。茶室を対象とした写しが、高度な複製技術の追求のみに限られていないのは、「作意機転」にもとづく創意がとりこまれていることの表れである。しかし、茶の世界での茶道具に対する価値観には、その器物の由緒来歴が深く関係しており、写しが造られる要因もここにある。したがって、創意あふれる写しを造る場合でも、写しの設計者は、待庵の由緒来歴に深く関わる利休の思想について熟考し、そのうえで継承すべき造形を決定する必要がある。ここでは、待庵の写し茶室に継承されている【待庵の造形的特徴】についてまとめることとする。

表4-1の茶室、及び表4-2の次ノ間(B. 壺中庵を除く)の状況を見ると、すべての事例で再現されている【待庵の造形的特徴】には、現在の待庵と史料との間に相違がみられないものが多い。つまり、古くからあると信じる【待庵の造形的特徴】が、写し茶室では多く採用されている。これは、茶室の由緒来歴を重視した茶の世界の価値観が影響していると考えられる。

【利休の思想的特徴】の〔①名物の否定〕の造形をみると、写し茶室に継承されているのは、「床開口内法高が低い」「削り加工された丸太の床柱」「丸太の床框」「土壁床」等の特徴である。これらは、利休の時代には革新的にとらえられた造りであり、また、現代では一般的な小間茶室に定着した造りでもある。〔①名物の否定〕が既に達成された現代では、これらの造りは茶室内部に侘び茶の景色をつくりだすための糸口として再現されている。

〔②小さな空間〕の造りをみると、写し茶室は必ず2畳茶室として造られている。空間を大きく見せる工夫をもたない場合でも、2畳の小ささが侘び茶の景色に必要なものと考えられている。

〔③採光の調整〕に関わる点では、特に窓の大きさが再現されている。これは、待庵の光環境の継承というよりも、窓や壁面構成を意匠的に再現しようとする意図の表れである。

〔④素朴な質感の材料〕をみると、写し茶室には丸太、竹、土壁等の素材の再現が多い。しかし、削り加工等で作り出される造形の再現は比較的少ない。

〔⑤細めの寸法の部材〕に関連する窓敷鴨居等の部材をみると、研究仮説⁷⁾にもとづくG. 工法庵以外では、可能な限り待庵の部材に近い寸法となるように製材されている。丸太や竹材も、待庵の部材に近い寸法のものが集められており、意図的に改変されることは少ない。

以上のように写し茶室をみると、【利休の思想的特徴】の中の〔①名物の否定〕、〔②小さな空間〕、及び〔④素朴な質感の材料〕につ

B. 壺中庵

C. 駿河待庵

D. 加賀待庵

E. 松閑席

F. 平成待庵

G. 工法庵

写真1 写し茶室の床ノ間のつくり

A. 待庵

C. 駿河待庵

D. 加賀待庵

E. 松閑席

F. 平成待庵

G. 工法庵

図2 次ノ間(f)面 展開図

図3 E. 松閑席
(c)面 展開図

図4 G. 工法庵
(b)面 展開図

0 500 1000 2000

図3/注釈 松閑席次ノ間の下地窓下部には水揚口がつく。
図4/注釈 工法庵の窓敷鴨居見付は大きく造られている。

D. 加賀待庵

E. 松閑席

写真2 炉と炉壇のつくり

写真2/注釈 加賀待庵は炉壇上部を丸く欠いた欠炉になっている。松閑席は1.4尺角炉で壁際(写真上方)に小板が入る。

いては、侘び茶の景色をつくる造形として再現されており、[③採光の調整]及び[⑤細めの寸法の部材]については、待庵特有の意匠的造形として再現されていることが考えられる。待庵の写し茶室では、【利休の思想的特徴】にかなう待庵の基本的造形として、[②小さな空間]に関わる茶室の広さや天井高、[③採光の調整]に関わる窓の大きさや壁面位置、及び[⑤細めの寸法の部材]に関わる製材の寸法が多く継承されており、これに加えて、特に現代の茶の考え方に沿った待庵の造りが選ばれ、再現されている。

5.2 写し茶室の獨創性

写しは本歌の再現を基本とするものであるが、研究対象写し茶室は、すべてが待庵そっくりには造られているのではない。4章で述べた次ノ間(f)面の窓のように、江戸期の待庵の造形が復元されている事例は多く(図2)、E. 松閑席では茶事機能を向上させるための大きめの炉や次ノ間の水揚口がつけられている(図3・写真2)。しか

し、このような復元や機能性のための設計のみならず、写し茶室の建築的個性をつくる造形も織り込まれている。ここでは、写し茶室独自の造形が追求されている部分とその状況をあげることにする。

写し茶室内部の例として、席の重要空間となる床の状況に着目する(写真1)。待庵の床柱は約2.2寸の細めの丸太で、柱全長の半分以上にまで削られた擦上げ^{注21)}という加工により木目肌が現されている。床框は丸太の皮目をみせ、見付につく3個の節が意匠的アクセントとなっている。そして、壁には長めのスサが入った土壁が施工されている。これらの野趣に富む材料は、[①名物の否定]に関連して整えられた材料や格式への否定となり、[④素朴な質感の材料]による慎ましさが演出されている。これに対し、E. 松閑席の床柱と床框、及びF. 平成待庵の床框には鉾目^{注19)}がつけられており、G. 工法庵の床框は面がつけられている。木材に鉾目や面をつけることは、材料の野性味をみせるとともに、その加工自体が職人(また

は加工者)の技量の結集となる。C. 駿河待庵・D. 加賀待庵・E. 松閑席・F. 平成待庵の茶室・次ノ間境建具方立につく鉾目も、待庵の再現と同時に、写し茶室を造る職人の設計意匠といえる。

G. 工法庵は『数寄屋工法集』^{注15)}の内容をもとに復元されているが、史料には材料に関する詳細な記述はない。そのため、茶室の床柱には足場丸太を磨いたもの、天井留りの丸太には中部大学構内の松林から伐採したもの、床框には建設地に生えていた柿の木を挽いたものが使用されている^{注22)}。このように、随所から材料を集め、一つ一つに丹念な加工を施す過程が、写し茶室独自の由緒来歴や、建築的個性をつくっていくことになる。

待庵には多種多様な素材が使用されており、それらと全く変わらない材料を調達することは難しい。しかし、写し茶室ではその状況を考慮し、材料の選定や扱い方に工夫をこらすことで、各茶室の独創性が引きだされている。そして、このような写し茶室独自の材料表現が、写し茶室の創意の表れとなり、また、写し茶室に対する施主や設計者の愛着を深めるものとなっている。

6 設計方針にもとづく写し茶室の類型と利休の茶精神

写し茶室を造る場合、写し対象とする本歌の寸法情報が必要となるが、抛り所となる本歌の情報は、写し茶室の設計方針によって異なっている。そのため、この設計方針のあり方によって、待庵の寸法・材料の再現成否及びその要因に相違が生じ、写し茶室の類型が現れると考えられる。

本研究対象においては、再現型、史料支持型、及び復元型の3種類の写し茶室がある。再現型とは、現在の待庵を忠実に写すことを最も基本的な方針としている写し茶室である。設計当時の待庵を本歌として想定し、それを再現することになる。研究対象の中では、B. 壺中庵・E. 松閑席の2席が該当する。史料支持型とは、江戸期の史料寸法を基本とし、現在の待庵の情報を二次的に用いて造ったものである。研究対象の中では、C. 駿河待庵・D. 加賀待庵の2席が該当する。復元型とは、史料支持型と同じく史料情報を基本とするが、史料作製期の待庵の復元が主体となっている。研究対象の中では、F. 平成待庵・G. 工法庵の2席が該当する。

以上の類型にもとづき、待庵の写し茶室の設計と【利休の思想的特徴】との関連について考察する。

再現型の茶室をみると、B. 壺中庵ではきわめて忠実な待庵の再現が計画されているが、[③採光の調整]の採光環境や、[④素朴な質感の材料]の材料加工の特徴は再現されていない。一方、E. 松閑席には改変されている部分が多く、鏡板張りの床天井を高く設えることによって格式のある雰囲気を印象づけている。また炉寸法を現在の定寸1.4尺角とし、次ノ間には水揚げ口をつけるなど、機能性の向上が計画されている。このような再現型茶室における【待庵の造形的特徴】との相違は、【利休の思想的特徴】をただちに否定するものではなく、敷地や建築施工方法等の制約、利休期と現代との茶のあり方の違いを解消した結果が現れたものである。

史料支持型のC. 駿河待庵・D. 加賀待庵には、ともに史料『楽翁起絵図』^{注13)}を基本とした寸法が採用されている。しかし、次ノ間(f)面の窓及び壁面構成(図2)以外には、史料当時と現在の待庵との大きな相違はないと考えられている。そのため、茶室・次ノ間境建具開口幅にみられるような、史料と現在の待庵との寸法相違があ

る場合は、現在の待庵の寸法が採用されることがある。また、現代の茶事利用に適応させるための改変も、極力、現在の待庵の造形に類似するように工夫されている。例として炉のつくり(写真2)をみると、待庵における1.35尺角の炉寸法に対して、再現型のE. 松閑席では1.4尺(1.39尺)角に拡張して使いやすくされているが、D. 加賀待庵では小さい炉寸法を維持したままで内部を欠炉^{注23)}とし、大きな釜も使用できるように造られている。このように、史料支持型茶室の寸法及び材料がともに現在の待庵に類似している要因は、江戸期の史料と現在の待庵との相違が少なく、現在の待庵が【利休の思想的特徴】を受け継ぐものとして確信されていることによる。しかし、現代の一般的な茶室の造りに改める意図は弱いため、場合によっては再現型茶室よりも現在の待庵に類似することがある。

これに対して、復元型の茶室は、現在の待庵のすべてを利休作とするには疑問があるということから設計が始められている。F. 平成待庵は、史料『山上宗二記』^{注14)}を参考に5尺床として設計されている(写真1)。立体的な構成については現在の待庵の造形を多く採用しているが、同史料の色付土壁等によって、利休の理想的造形を明らかにする試みが行なわれている。G. 工法庵はさらに復元意図が強く、史料『数寄屋工法集』^{注15)}の寸法をもとに、床壁の土塗廻しをしないことや土間庇をつけない等の検討が行なわれている。特に顕著なのは、(b)・(c)面の窓敷鴨居の見付幅を大きくしていることである(図4)。これは現在の待庵とも、また『数寄屋工法集』とも異なる寸法であるが、利休の理想的造形について探究されていることがわかる。以上の復元型茶室の寸法及び材料の状況は、現在、一般的にいわれている【利休の思想的特徴】やその原点を改めて検証し提示されたものである。つまり、【待庵の造形的特徴】の根源となる【利休の思想的特徴】を再考し、それに新たな解釈を加えたものとして表されている。

以上のように、待庵の写し茶室は、設計方針にもとづく類型によって【利休の思想的特徴】に関する実態が異なっている。待庵の写し茶室は、【利休の思想的特徴】が息づく理想的茶室を求めて造りだされている。設計者が現在の待庵を利休の理想的茶室と考えている場合、現代の茶室の寸法造形に調和させた再現型茶室や、江戸期からほぼ変わらなく維持されている待庵を表した史料支持型茶室が造られている。これに対し、現在の待庵をもってしても利休の理想的造形には不明瞭な点があると考えられる場合、【利休の思想的特徴】を改めて検証し、新たな解釈を加えた復元型茶室が造られている。

7 まとめ

本研究では、茶室の寸法と材料を中心として、【利休の思想的特徴】が待庵の写し茶室の設計に与える影響、及びそれらの関連要因を検証した。近現代の待庵の写し茶室では、待庵をそのまま再現するだけではなく、各々で利休の茶精神に対する解釈を行ない、利休の理想的造形を表す茶室として造られている。利休の茶精神に対する研究対象茶室の実態を以下にまとめる。

- (1) 近現代の待庵の写し茶室では、利休の茶精神にかなう待庵の基本的な造形として、茶室の広さや天井高、窓の大きさや位置、及び製材の寸法が多く継承されており、これに加えて、特に現代の茶の考え方に沿った待庵の造りが再現されている。
- (2) 写し茶室では、待庵とは異なる材料選定及び材料加工を加える

ことによって、写し茶室の独創性がつくりだされている。このような材料表現が創意の表れとなり、写し茶室独自の建築的個性となっている。

- (3) 近現代の待庵の写し茶室は、設計方針のあり方によって、待庵の寸法・材料の再現成否及びその要因に関する類型が現れる。本研究対象では、設計当時の待庵を再現した再現型茶室、史料を基本とし現在の待庵の情報を二次的に用いた史料支持型茶室、史料作製期の待庵の復元を主として行なった復元型茶室の3種がある。
- (4) 写しの設計者が、現在の待庵を利休の理想的茶室であると確信している場合、待庵の寸法・材料の一部を現代の茶室に調和させた再現型茶室や、史料を基本としながらも現在の待庵の寸法・材料を多く取り入れた史料支持型茶室が造られている。なお、史料支持型茶室は、現在の待庵は江戸期からほぼ変わらないという仮説にもとづいており、待庵の写し特有の類型である。
- (5) 写しの設計者が、現在の待庵をもってしても利休の理想的造形には不明瞭な点があると考えられる場合、利休の茶精神を改めて検証し、新たな造形的解釈を加えた復元型茶室が造られている。復元型茶室では、現在の待庵と大きく異なる部分があっても、利休の理想的造形を探究した結果として理解されている。

謝辞

本研究の実施に当り、分析及び設計調査へのご協力を頂きました京都工芸繊維大学名誉教授 中村昌生先生、(株)堀尾佳弘建築研究所 堀尾佳弘氏、(有)伊藤平左エ門建築事務所名古屋事務所 望月義伸氏に感謝致します。また、現地調査へのご協力を頂きました研究対象茶室関係者の皆様に感謝致します。

注

- 注1) 文献2), p. 133 参照。
- 注2) 本歌とは、他人によってまたは後世その原形を基にして同形式の器物が造られた場合、その原形の器物を指す。写しと対照の語。文献2), p. 1557 参照。
- 注3) 中村昌生: 造形の基本を語る 茶室設計と和風への展開, 中村昌生が語る建築講座 古典に学ぶ茶室の設計, (株)ナクスナレッジ, pp. 175-184, 1999. 10 参照。
- 注4) 多数の史料・伝承により待庵は千利休作と伝えられてきたが、現在の学術研究段階では断定されていない。しかし、待庵の写し茶室は数多く造られている。
- 注5) 後藤千夏, 廣川美子, 瀬口哲夫: 〈写し〉による茶室の継承に関する研究—妙喜庵茶室待庵を事例として—, 日本建築学会計画系論文集, 第73巻第633号, PP. 2475-2482, 2008. 11 参照。
- 注6) 文献3), 六の一 利休と妙喜庵園, pp. 367-391 参照。
- 注7) 牧孝治: 加賀の茶道, (株)北国出版社, pp. 71-80, 1983. 4 参照。
- 注8) 私的茶室が公表されない場合が多く調査交渉が困難なため、研究対象茶室には、寺院所有茶室や公共茶室を中心とした公表されている茶室を採り上げた。

- 注9) 写し茶室の中には待庵の茶室・次ノ間・勝手・外部等までも再現する事例があるが、本研究の基本的な分析対象としては、茶事で客の視野範囲に入る茶室及び次ノ間の内部とする。
- 注10) 『南方録』は、南坊宗啓著・立花実山編集と推測されている江戸中期の茶書。
- 注11) 文献12), pp. 167-168 参照。
- 注12) 文献3), 一の二 利休好み茶座敷と本式四畳半, pp. 57-60 参照。
- 注13) 『茶翁起絵図』とは1830年以前に作製された『松平家旧蔵数寄屋絵図』妙喜庵園建地割。図の内容は文献13), pp. 292-299 参照。
- 注14) 『山上宗二記』は1590年以前に山上宗二により作製された史料であるが、本研究では、特にその中の『関白様御座敷二畳』の図が参照されている。図の内容は文献13), p. 25 参照。
- 注15) 『数寄屋工法集』とは1686年頃に伊藤景治により記された『雛形数寄屋工法集中巻』利休園之事。図の内容は文献14), pp. 625-629 参照。
- 注16) 文献3), 六の一 利休と妙喜庵園, pp. 385-388 参照。
- 注17) 文献4), pp. 84-88 参照。
- 注18) 金沢の茶室編纂委員会: 現代に息づく茶道のまち 金沢の茶室, 金沢市, pp. 208-209, 2002. 3 参照。
- 注19) 鉾目とは、鉾目削り(木材の表面を鉾ではつり仕上げること, 文献2), p. 1075) の削り面を指す。
- 注20) 筭面とは、皮付きの床柱の見付下部を削ることで、筭状に作り出した削り面をいう。文献2), p. 994 参照。
- 注21) 擦上げとは、柱の見付下部から柱全長5/8の高さまで削り、丸太柱の木肌を見せる手法。文献17), pp. 261-262 参照。
- 注22) 伊藤平左エ門: 工法庵 妙喜庵利休園の復原, 和風建築シリーズ3 茶室/(株)和風建築社, (株)建築資料研究社, pp. 50-51, 1998. 8 参照。
- 注23) 欠炬とは、茶室の炬形式の一。大きな釜を掛けるために炬壇の四方の上角を釜の丸みだけ欠き取ったもの。文献2), p. 264 参照。

参考文献

- 1) 中村昌生: SD選書53 茶匠と建築, 鹿島出版会, 1971. 1
- 2) 株式会社彰国社: 建築大辞典第2版〈普及版〉, (株)彰国社, 1997. 4
- 3) 堀口捨己: 利休の茶室, (株)岩波書店, 1949. 1 (1995. 9復刻版)
- 4) 中村昌生: 待庵 侘数寄の世界, (株)淡交社, 1993. 4
- 5) 大和智: 茶室の「写し」, 建築雑誌 VOL. 105 No. 1297, 日本建築学会, PP. 40-41, 1990. 3
- 6) 中村利則: 妙喜庵待庵覚書, 茶の湯12/木芽文庫編, 思文閣出版, pp. 16-42, 1976. 11
- 7) 伊藤平左エ門: 利休茶室の復原, 中部大学工学部紀要26, pp. 143-156, 1990. 10
- 8) 中村昌生: 数寄屋と五十年 茶の建築の研究と和の創造をたどる, (株)淡交社, 2007. 3
- 9) 小森松庵: 谷村良治さんの茶会, 陶説第274号, 日本陶磁協会, pp. 37-39, 1976. 1
- 10) 岡田孝男: 京の茶室 東山編, (株)学芸出版社, 1990. 6
- 11) 中村利則: 茶室でたどる茶の湯の歴史 二. 通儒院庭玉軒と祖形待庵, 淡交No. 735, (株)淡交社, pp. 56-61, 2006. 2
- 12) 千玄室: 茶の精神, (株)講談社, 2007. 1 (底本/1969年淡交社刊行)
- 13) 中村昌生: 数寄屋古典集成1 利休の秘室, (株)小学館, 1987. 11
- 14) 藝能史研究會: 日本庶民文化史料集成10 数寄, (株)三一書房, 1976. 11
- 15) 太田博太郎(代表): 日本建築史基礎資料集成20 茶室, 中央公論美術出版, pp. 115-119, 1974. 4
- 16) 岡田孝男: 京の茶室 西山・北山編, (株)学芸出版社, 1990. 6
- 17) 安井清: 伝統建築と日本人の知恵, (株)草思社, 2007. 4

(2009年12月10日原稿受理, 2010年4月23日採用決定)